

報告Ⅰ 胡錦濤「緩兵の計」——党17回大会の人事

(東京新聞論説委員) 清水 美和

こんにちは。東京新聞の清水と申します。本日は中国研究において長い歴史と伝統を誇る中国研究所の公開講座に講師としてお招きいただき大変光栄でございます。私自身、中国問題について、比較的長く現地に滞在したことはありますけれど、何か専門家というようなレベルの者ではございません。中国研究所の研究の主旨から若干外れたようなお話をすることになってしまうかもしれませんが、1時間ほど我慢してお付き合いしたいと思います。

私に与えられたテーマは、今度の党大会を、人事を中心に分析してみろということなのですが、これは非常に難しいテーマですね。と申しますのは、確かに今、中国共産党はさまざまな報道・宣伝の分野においても開放を続けてきておりまして、個別の政策レベルではかなり党のメディアとか、あるいは最近新聞業界に現れた新しい商業新聞とかでは公然とした論争が繰り広げられていて、確かな情報に基づいて論議ができるのですけれども、例外があります。

それは言うまでもなく、党の最高指導部、中南海の意思決定に関する問題であります。個々の政策課題についてさまざまな研究者が論文を発表していますが、それを党中央がどう判断したのか、あるいは誰がどういう立場をとったのかということは、個別の政策レベルにおいても明らかにされておりません。ましてや党の人事についてはですね、そのプロセスはまったく公開されていません。まったくのブラックボックスです。

党大会が終わった後に実はこうやって決めただと、党中央の決定に至るプロセス、ドキュメントというものが、党の公式文書、新華社の発表に

よって報道されるんですけども、これは言ってみたら、後付けの理屈です。それを、まともに信じるならば、今回党大会の最大の焦点であった習近平、李克強の2人もですね、当初から党内の民主的な意見聴取手続きを経て、将来を見据えて指導者を競わせる意味で、極めて民主的に党中央に入った、というような説明になります。これはもう明らかにフィクションです。洋の東西を問わず、最高権力をめぐっては、非常に厳しい利害対立あるいは人事抗争というものが繰り広げられておるわけで、もしこれをそのまま信じて報道とか論文に使ってしまうならば、言葉はちょっと悪いですが、共産党が作ったフィクションに加担してしまうことになりかねません。

これは、アカデミックな仕事としても不適當であるだけでなく、私共ジャーナリストにとっては仕事にならない。共産党の宣伝に乗っかって、フィクションを報道することになってしまいます。それでは、それをどう突破するのか。それはさまざまなニュースソースを通じた非公式な情報、あるいは香港・台湾において広がる、さまざまな情報、最近ではインターネット上の各種情報も参考にしつつ、1つ1つ判断をして、確からしい情報を採用していかざるを得ない。ですが、これは言うまでもなく1つの仮説に過ぎない、言葉を換えて言えば推論に過ぎない。そのことが実際にそうであるかどうかというのは、かなり長い年月を経て初めて裏付けられる。

最近出版されて非常に話題になりました『周恩来秘録』というものがございますが、実は毛沢東・周恩来の関係が当時喧伝されたような麗しい最高指導者とそれを支える宰相の関係ではなく、

実はすさまじい軋轢があったということが、党中央文献研究室の方の手によって明らかにされたわけですね。

今回の党大会の人事についてもまったく同じですね。人事をめぐっても激しい人事抗争が繰り広げられた。そういうプロセスを、今からお話するわけではありますが、これは当然さまざまな非公式・未確認の情報に基づく1つの仮説に過ぎないということを最初にお断りしておきたいと思います。ただこういった仮説を提示する意味はですね、先ほど申し上げたような党の宣伝に基づくフィクションにとどまらず、現在中国の共産党内部で何が起きているのかを判断する1つの材料になるという意味があるわけです。

突然浮上した習近平

さて本論に入ります。今回党大会で最大の人事の謎は、1つは習近平と李克強が2人とも政治局常務委員に入った。習近平に関しては党大会の1ヶ月前まで、政治局常務委員の下馬評にものぼらない、突然彗星の如く現れたスターであります。

もう1つは曾慶紅の引退ですね。

胡錦濤体制の下において、胡錦濤と並ぶ実力者であった曾慶紅がやはり最終的に引退した。この2つが、党大会の謎であるわけです。それを私は今からさまざまな情報をもとに1つの推論・仮説を提示したいと思います。

李克強が胡錦濤の意中の指導者であるということとは随分長く前から言われておりました。李克強について詳しい説明はここではいたしません。胡錦濤と同じ共産主義青年団の中央第一書記を経験し、早くから次期指導者を期待されて、河南省や遼寧省など非常に困難な問題を抱えた省で省のトップを務めてきた。行政経験を積んできた。胡錦濤の意中の人が李克強であろうということは、もう何年も前から言われておりました。

ところが、ふたを開けてみるとですね。あには

からんや、上海市のトップになってから半年足らずの習近平が李克強よりも上位の政治局常務委員になり、中央書記処書記になっていて、次期総書記の最有力候補になった。中国共産党の常識でいえば、中央書記処書記をやり、党内序列も上ということになれば、事実上総書記に決まったといっても良い。

この意味は何か。それを、まず考えてみたいと思います。この背景を考えるには、やっぱり1年前から胡錦濤体制が進めてきた党内の特殊利益集団との闘いを振り返ってみる必要があると思います。皆さまのご記憶にも新しいかと思いますが、昨年の9月に上海市の党書記の陳良宇、しかも党中央の政治局員である陳良宇が突然解任され、その後、腐敗汚職が原因で正式に逮捕された。まもなく裁判が始まると思いますけれども、上海市の党書記という非常に高い地位の人物が汚職事件で逮捕された。

その後、陳を拘束した党中央規律検査委員会が北京、天津、あるいは広東などに派遣されて、各地のトップレベルの指導者を取調べたり逮捕したりした。これが、この1年胡錦濤体制が展開してきた反腐敗闘争なわけであり。それを昨年ごろから党中央文件のなかでも特殊利益集団との闘いであるとはっきり打ち出しております。

一体この党内の特殊利益集団とは何なのかということを考えてみたいのです。私の知る限りそれを最も簡潔に且つ要を得て説明したのは、今年の7月に陳良宇に対する党籍・公職解除の決定、それが公表されているわけですが、それを読むとですね、特殊利益集団が何であるのか非常によくわかる。ちょっと引用してみます。

「陳良宇に対する党籍・公職解除の決定（07年7月）」、これによりますと、「上海市黄浦区区長、党市委員会の副秘書長、市委員会の副書記、副市長、市長代理、市長、市委員会の書記、中央政治局委員の間、職権を乱用し上海市労働・社会保障

局が不法企業に社会保障基金を不正融資したことを支持し基金の安全に危害を加えた」。労働者たちの社会保険のための基金を勝手に民間企業に融資したということが冒頭に掲げられているんですが、その次に「不法な企業が国有企業を株式化する権限を買収することを支援し、国有資産に重大な損害を与えた」、「事業の審査や資金の調達、企業の合併、土地開発、人事などの権限を利用し数多くの財物を受け取り、親族のビジネスで巨額の利益を得させた」。

つまり国有資産、国有企業とか国有の土地というものをさまざまなかたちで横領し、それによって巨額の富を築いた。最後に、「道徳は退廃し、職権で女性をもてあそび、権力と色情の交易を行い、重大な規律違反を犯した部下を庇護した」と糾弾している。

これが、末端の不心得な党幹部の犯罪であればまだ良いのですが、陳良宇は上海市のトップですね。上海市のトップというとは日本では大阪の市長くらいにしか感じませんが、中国では上海市のトップというのは次期中央指導者の最有力候補です。

陳良宇の前任者には江沢民総書記もおられますし、朱鎔基首相もおられる。朱の後任は黄菊という今年亡くなられた副首相ですが、さらに陳の後任は習近平という次期総書記の最有力候補となっている人物です。当然陳良宇も次期総書記、首相の最有力候補に見られていた。この方が上海市の区長時代から党の権力を使って巨額の不当利得を蓄積し、資産を蓄えた、一説にはその資産は数千億円にのぼるのだという情報も流れておりますが、もう信じ難いような、一国の財政を傾けるほどの資産を党の権力を使って蓄えていた。これこそが党内の特殊利益集団であるわけであります。

しかも、それが中央レベルで党のトップまでうかがうところまで共産党の中にビルトインされている。それと、いかに対決していくのかというの

が胡錦濤政権の課題であったわけであります。

胡錦濤政権のこの5年の歩みを振り返ると時間が足りなくなりますので、一言だけ申し上げます。胡錦濤も当初はですね、いわゆる政治改革、情報の公開、マスコミの監督機能の強化、あるいはさまざまな社会の改革を求める勢力と連携・連帯してそれを進めようとした時期があったように思われます。ただ明らかにですね、途中から方向が変わってきました。

党の中央規律検査委員会という、検察権力を使って、腐敗汚職というものを次々と摘発しました。さらに党内勢力でいえば、彼が共産主義青年団の中央第一書記の時代から気心の知れた共青团系の幹部を、腐敗幹部を摘発すると同時にその後任にどんどん送りこんで、自らの信が置ける党幹部を増やすことによって、党の規律を確立していかうとする。

同時に党内でさまざまな規律条令とか、いわゆる法治の徹底をやりつつ、それを推進する勢力としては共青团系幹部を重用したということが言えるわけです。

現在、31の省・市・自治区の半分くらいのところで共青团系がトップを占めておりますが、中央の閣僚級の中でもどんどん共青团系の勢力が伸びている。こういうことに対して、実は党内の富裕層、党内の既得利益集団の中で非常に危機感が高まってきたということは想像に難くないわけであります。

この既得利益集団というのは何か。これは言うまでもなく、この上海の陳良宇さんの事件に象徴されるような、江沢民前総書記および国家主席の政権のもとで、さまざまな既得利益にあずかったグループです。それが沿海地区の繁栄した都市を中心にして非常にたくさんいるわけです。

それは中央レベルにまで、中央でいえば江沢民もそうですし、先日亡くなられた黄菊、あるいは陳良宇というようなかたちで人脈的にもつながっ

て、党の文件が指摘していますように、さまざまなかたちで規律違反を犯した腐敗幹部を擁護してきた。そういう構造がもうビルトインされているわけであります。

ですから取りも直さず、胡錦濤政権にとってこの反腐敗闘争というのは、江沢民前総書記にすぎる上海グループ集団に対する権力闘争の側面ももっていたと私は思います。

李克強に激しい反発

それでは、そこでなぜ習近平があがってきたのか。以下から申し上げることは私の情報ですので、公式に確認されたものではありません。私の聞いたところでは、今年の夏に胡錦濤が党の上層部、政治局OBも含む上層部に提案した人事案は政治局常務委員の9人を7人にして、李克強を次期指導者含みで中央に入れるという人事案であったそうです。

ところがこれは党の上層部でものすごい反発を受けた、というふうに聞いております。北戴河の会議というのは胡錦濤が国家主席になってからしばらく中断していたのですけれども、今年は人事調整のために断続的に北戴河に党の上層部が集まって、調整が行われたそうです。その中で激しい李克強に対する反発があった。

これも未確認情報ですが、羅幹という李鵬元首相につながる政治局常務委員は「李鵬同志は李克強を絶対に許さない」と言ったと聞いております。一体、なぜ李鵬が絶対許さないと言ったのか、これについてはまったくわかりません。1つの推測ですけれども、李克強は北京大学の学生会出身でですね、同学年には王軍濤という天安門事件で海外に亡命した知識人とか、さまざまな民主派知識人が多くいた。彼らは以前から李克強に対して、彼がもし総書記、最高指導者になったら政治改革をやるに違いない、だからわれわれは李克強の就任を望む、というエールを送っていたので

すね。李克強に対する改革派、民主派の期待は非常に高いものがあつたのです。

逆に言ったらそれは、李鵬のような天安門事件当時の弾圧の責任者にとっては、そういった人物が次期指導者になるということは、非常にリスクを伴う危険なことなのですね。ひょっとしたら天安門事件の評価が転覆されて、自分たちが断罪されるかもしれない、そういう恐怖を覚えている。さらに、党内の富裕層を中心とした既得利益集団の中では、胡錦濤、李克強の共青团人脈は、これまで反腐敗闘争というものを強力に推進してきたグループですから、それに対しても警戒感がある。李克強に反対する勢力が一致して推してきたのが習近平である、と聞いております。

習近平というのは、皆さんもご存知のように習仲勲という全人代の副委員長まで務められた方のご子息の「太子党」であります。最近になって太子党のわりには、作風が良くて非常に控えめであるとか、生活態度も非常に清廉であるとか、いろんな宣伝がされております。

私自身が聞いた中で、習近平の最大に評価されているところは何か。これはですね、90年代末に福建省のアモイを舞台にして建国以来最大といわれた密輸事件があつたことを皆さんご記憶だと思います。この事件は、当時江沢民主席、朱鎔基首相の体制の中で、朱鎔基が徹底捜査を命じた。ところがですね、福建省のトップは事件当時、賈慶林だったんですが、賈慶林は密輸事件に政治責任があるばかりではなく、奥さんが貿易商社を経営していて、事件に関与した疑いがあるといわれた。この事件の捜査を徹底していけば賈慶林の立場が危うくなるということで、江沢民は何とか賈慶林を守ろうとする。

いってみれば江沢民という党の最高実力者と朱鎔基という経済面の非常に厳しい行政責任を負っている首相とが真っ向から対立した事件です。習近平はこの事件の処理を「非常漂亮」にやったと

聞きました。大変美しくという言葉の意味が、非常に曲者でありまして、中国では必ずしも事件を徹底捜査するという意味ではない。つまり、江沢民、朱鎔基という相対立する両最高指導者の面子を立てつつ事件処理を巧みに行ったということが、習近平の評価を非常に高めたと私は聞いております。

結局この事件の処理は終わって、賈慶林は政治経歴に瑕がつくこともなく、その後北京市党書記から今では政治協商会議という中国で最高の榮譽のあるポストの1つに就いているわけです。これは、やっぱり習近平の非常に巧みな対応があった成果と評価されています。このように考えてみると、今年の3月に陳良宇事件で空席になっていた上海市党書記になぜ習近平が推されたのか。その理由もなんとなく推し量ることができると思います。

しかも、胡錦濤・李克強に反対する勢力がなぜ習近平を一致して推したのか。現在の中国共産党で最大の焦点になっている反腐敗闘争、特殊利益集団に対する闘いの中で、なぜ習近平が次期最高指導者として推薦されてきたのかというのがわかるような気がします。一言でいえば、習近平という人物は、こういったさまざまな既得利益集団の利害を調整しつつ、巧みに党の運営をしていける人物と見なされているということであると思います。

私の聞いたところでは当初は、李克強、習近平の2人とも政治局常務委員に入れずに、政治局員に留めて競わせるとか、さまざまな案が浮上したと聞いております。さらにその2人を同時に政治局常務委員に入れるにしても、どちらが党務を担当するか。

やはり中国では党が上でありますから党務を担当した方が、次期総書記の最有力候補になります。そういうことで最後まで調整が手間取った。現に私は、大会の前日に、あるリストをもらった

のですが、その中には李克強が習近平より上に書いてありました。

李克強が党務をやることになって、中央書記処書記は李克強だというリストを私はいただいて、やっぱりこうなったのかな、この方が胡錦濤の意に沿うのではないかなと思って、安心していました。ところが、蓋を開けてみたら意外にも、香港紙の一部が書いたように、結果的には習近平が上で、党務をすることになった。これで、次期総書記は習近平に決まりだという声が今強くなっています。

というのは、中国共産党の伝統でいえば、こういった党内序列、しかも党務を担当している人をひっくり返すというのは容易なことではない。胡錦濤もそれを飲んだのではないかと、といわれております。ただこの点について、私は非常に疑問に思っております。それは一番最後に申し上げます。

次に、曾慶紅の問題ですね。曾慶紅の問題というのは非常に難しい問題です。先ほどちょっと地下鉄の駅でNHKの山田さんに会いまして、ここで歩いている間にも曾慶紅論をめぐって意見を戦わせました。

論議やまない曾慶紅

曾慶紅をどう見るかというのは非常に難しい問題です。曾慶紅はご存知のように天安門事件で江沢民が中央の総書記になる時に唯一、上海から連れてきた側近中の側近であります。なぜ曾慶紅が江沢民にそこまで頼りにされたのか。1つはですね、これもちょっと古い話になって恐縮ですが、曾慶紅は江沢民が総書記に抜擢される一番大きなきっかけを作った。1989年の天安門事件を前に、党内が鄧小平を中心とする民主化運動を反革命動乱と決めつけ徹底的に対決するという勢力と、趙紫陽総書記を中心とする民主化運動を愛国民主運動と位置づけて、むしろそれをエンカレッジして

いく、あるいはそれを利用するかたちで党内の権力闘争を有利に展開しようとする勢力が真っ向からぶつかりました。

この時に、江沢民は『世界経済導報』という上海の有名な民主派の新聞を閉鎖して、つぶして旗幟を鮮明にした、そのことが最も鄧小平に評価されて江沢民が中央の総書記になる原因だったのです。実は、それを実際にやったのは曾慶紅で、当時上海市副書記の曾慶紅が『世界経済導報』の弾圧という荒業を成し遂げたのです。逆に言ってみれば、江沢民を中央の総書記に押し上げたのは曾慶紅の力であった。

さらに、その後92年、江沢民が軍事委員会主席として、軍事委員会内部の楊尚昆・楊白冰兄弟という非常に強力な軍内の反対勢力とぶつかった。楊尚昆は軍事委員会の副主席、楊白冰は軍事委員会秘書長で非常にパワフルな勢力だったのですが、それに対して軍の有力者、老人たちと話をつけて楊兄弟を事実上失脚させ、軍権を掌握する時にも曾慶紅の力は非常に大きかった。

曾慶紅のお父さんは軍出身で、曾山という内務大臣を解放区と共和国の2回も務めた非常に有力な幹部であります。お母さんは人民解放軍の長征の時に保母さんとして軍幹部の息子・娘たちを、それこそ育てた文字通りの革命の母でありますから、非常に深い人脈を軍内にもっていたわけですね。

それを曾慶紅は活かして、江沢民を助けた。この結果、江沢民の権力は確立し、曾慶紅はその後一時、江の後任総書記をうかがうような時期もあったのですが、結果的には国家副主席、中央書記処書記となりました。胡錦濤体制になってからも曾慶紅は非常に有力な役割を果たしました。

いくつかあるのですが、例えば一昨年になりますが、胡耀邦の一部名誉回復を胡錦濤がやろうとして、胡耀邦生誕90周年の記念大会をやった。この時、この胡耀邦の立場というのは非常に微妙で

すから、誰もがあまり関わりたくないなかで、曾慶紅は自ら基調報告を買って出て、胡錦濤を助けた。あるいは趙紫陽が亡くなる時、趙紫陽はいまだに全然名誉回復をされていないですけど、臨終の場に立ち会って、事実上葬儀委員長を務めたのが曾慶紅でありました。

つまり胡錦濤体制になってからも、非常に鍵となる時期に胡錦濤を助けた、さらに先ほど申し上げた陳良宇の逮捕、この件についても曾慶紅の支持なくして上海事件の摘発は不可能であったし、陳良宇に最後の引導を渡したのも曾慶紅だったと言われています。このように、胡錦濤体制のなかで曾慶紅は非常に鍵となる役割を果たしている。さらにわれわれに身近なのは、曾慶紅は対日政策について大変理解がありました。ですから、2001年4月に小泉純一郎首相が2回目の靖国参拝をして、大変中国の怒りを買った時、江沢民は絶対許せないと語った時に、曾慶紅は予定通り九州の大分で開かれた催しに参加して、野中広務自民党幹事長などと交流し、対日関係を重視する姿勢を示した。曾慶紅は、この間の中国共産党の対日政策転換に胡錦濤を助けて非常に重要な役割を果たした人であります。

曾慶紅をどう見るかというのは専門家の中でも意見が分かれています。やはり、この人は江沢民の側近で、胡錦濤を助けたのも胡錦濤を助けて結果的に江沢民の権威を守るためであったという人と、いやそうではない、曾慶紅は江沢民から胡錦濤へ擦り寄ったのだというような見方もあった。さまざまな論議が分かれる非常にコントラバーシヤル (controversial) な人間でありまして、この方の去就というのは1つの大きな焦点でありました。

中国には党の政治局常務委員について68歳定年があるといわれております。これは過去に明文化された規定が出てきたわけではありませんので、必ずしも確立したとはいえなかったのですけれど

も、この68歳をもって政治局常務委員を引退させるというのが、前回16回大会の李瑞環政治協商會議主席の引退にも適用されました。今回もこの68歳で線を引くと、今配った表の中（文末参照）でありますように、他は67歳以下の方ですね、ところが曾慶紅だけが68歳になっているわけです、党大会の時点で。ですから、引退に追い込まれるのではないかと、いろいろな意見・観測がありました。

曾慶紅が早くから辞意を表明しているという報道はありました。ただこれはですね、中国の場合、定年を間近に控えた指導者が辞意を表明して慰留を待つというのは一種の約束事でありますから、これが決定的に辞任を決定させるとは思えませんでした。つまり、それが受理されるかどうかは、その後の問題なわけです。このことについても、以下は私がいろんなソースから聞いた話で必ずしも公式に確認できるわけではありません。

少なくとも夏ぐらいの時点までは曾慶紅は留任の方向だったという話であります。やはり曾慶紅の立場は非常に重要でありますし、胡錦濤にとっても曾慶紅は使える面もあるのですね。

ところが、これも非公式な情報でありますが、私の聞いたところでは、9月2日に胡錦濤が党の人事案をめぐって、政治局委員以上のメンバーそれぞれに個別に意見を聞いたところ、ほとんど留任反対であった。この結果、胡錦濤は定年制を規定通りに適用して、曾慶紅を引退させる決意を固めたと聞いています。

これについては、繰り返しますが非公式の情報でありますから、本当かどうかの裏付けは取れないのですが、多くの人が曾慶紅の留任に反対したというのはどうも事実のようであります。それから、江沢民自身も賈慶林をとって、曾慶紅の辞任は飲んだというのが結果からうかがえるわけです。江沢民にとっては曾慶紅、賈慶林というのは非常に重要な側近でありました。ところが賈慶林

については先ほど申し上げたような、福建時代以来のいろんな政治スキャンダル、経済腐敗の問題がある。さらに最近北京市党書記の時代の部下や秘書が次々と逮捕されている。さまざまな腐敗・汚職について、ひどく悪い情報がいっぱいあるということで、賈慶林は67歳ではあるが引退に追い込まれるであろうというのが大方の見方でありましたが、結果的には賈慶林はポストを保った。これは、やっぱり江沢民は最終的には曾慶紅の辞任は飲んでも賈慶林は守ったということがいえるのではないのでしょうか。

賈慶林守った江沢民

曾慶紅は大変な切れ者で優秀であったのですが、人望がないという弱点がありました。つまり、一貫して最高実力者の側近であった、それに極めて近いところに寄り添って自らの地位を高めてきた。江沢民体制のもとでも曾慶紅は政治局委員候補でした。政治局に欠員が出まして、中央委員会で政治局委員候補を政治局委員にするという審議がされた時に、3回も中央委員会で政治局委員候補から政治局委員になるのを否決されたという情報を聞いております。曾慶紅自身の江沢民にも胡錦濤にも食い込んでいく、その姿勢というのは、やはり党内ではやっかみと反発を買ったのではないかと推測はできるわけであります。結果的にはこの人望のなさ、さらに最終局面で江沢民・胡錦濤の、どちらにもつかない姿勢というのが結果的に災いして曾慶紅は引退に追い込まれた、というふうに私は聞いております。

ただ、一方で曾慶紅は引退しても影響力を保つだろうという見方もあります。と申しますのは、習近平が上海市の党書記になる時に、胡錦濤は統一戦線部長の劉延東を推したのだけれども、曾慶紅が習近平を推して結果的にそれが通ったという情報があります。それから今回政治局常務委員になりました賀国強は曾慶紅が推薦して組織部長に

した経緯があります。それから周永康は同じ石油産業の出身で非常に曾慶紅に近い。また、これは未確認で疑わしいのですけれども、妹の夫だという説もあるくらい曾慶紅に近い方ですから、現実には今回政治局常務委員に入った3人は曾慶紅に近い。ですから、曾慶紅は今後も影響力を保つだろうという見方があります。

以上の話を総合して現在の政治局常務委員のメンバーを見ますと、結果的には上海グループといわれた呉邦国、賈慶林、それから李長春の3人が残った、新たに入った4人も、李克強を除けば明確な胡錦濤系という人はいない。むしろ上海グループ、曾慶紅に近いというような立場で、結果的には現在の政治局常務委員、最高指導部の構成を見ますと、権力バランスは16回大会当時の政治局常務委員とあまり変わりのない、むしろ結果的には必ずしも胡錦濤の意の通りになっていないのではないかと。特に習近平が李克強の上になったというのは結果的に胡錦濤は敗北したのではないかと。いう見方もあります。ただ、私は今後江沢民・上海グループの影響は非常に低下するだろうと見ております。と申しますのは、何人かの指導者は残ったのですが、結果的には曾慶紅がいなければ上海グループはたいしたことができない、曾慶紅を欠いた上海グループというものは必ずしも胡錦濤にとって脅威になり得ない。むしろ今後胡錦濤にとって脅威になり得る、あるいは李克強にとって脅威となるのは、太子党といわれる人々が党内の既得利益集団というものを背景として、さまざまな胡錦濤政権の政策に対して掣肘を加える可能性がある。

政策面では後ほど浜先生がお話になるので詳しくは立ち入りませんが、例えば胡錦濤政権が掲げている「和諧社会」の建設に向けた所得再分配政策、あるいは経済のバブル規制、そういった富裕層の利益を侵害するような政策に対しては、さまざまなかたちで掣肘が加えられる可能性がある

ということだけ、一言申し上げたいと思います。

それでは、胡錦濤は負けたのか、という問題です。ここでもう1つ重要なポイントを指摘しなければなりません。つまり私の講演のタイトルがありますが、これは「緩兵の計」で、胡錦濤はこのまま引き下がるつもりはないのではないかと。5年後を見据えて、共青团主導の人事を実現するだろう、そして最高指導部になんとか李克強を押し上げるのではないかとという推測を私はしております。

民主カード切った胡錦濤

と申しますのは、今回の党大会は非常に重要なポイントがあるんですね。今回の共産党大会で一番大きなポイントは党内民主の拡大というのが行われた。これは従来行われていた中央委員とか中央委員候補の「差額選挙」の拡大にとどまりません。実は、党の指導部である政治局委員の選出をめぐってもですね、共産党の歴史で初めて公式に予備投票が行われたのです。これは中国国営新華社の報道で初めてわかったのですけれども、6月下旬に政治局選出に向けた予備民主推薦投票が行われた事実が明らかにされました。これは、非常に面白いのです。

どういうやり方をしましたかといいますと、党の16回大会で選ばれた中央委員、さらに中央委員候補400人を集めて200人の政治局委員候補のリストを示して、それに人気投票をさせたのです。なぜ、人気投票というのかというと、党の指導部は17回党大会の中央委員が選ぶものですから、16期の中央委員には投票権がない。現実には人気投票の意味以上はない。しかも候補者は、党・政・軍の閣僚級幹部、軍は軍区長以上の幹部で、年齢は63歳以下の者に限ったと書いてあった。この年齢制限が非常にポイントなのです。

つまり、先ほど申し上げた留任した政治局常務委員は、ほとんどが64歳以上ですので、この人気

投票で民主的な評価という洗礼は避けられる。逆に言えば、面子は保てる。例えば、賈慶林などがもしこのリストに入っていたらほとんど得票を得られなかったと思います。そのくらい配慮がしてあります。

もう一方63歳以下ということはですね、5年後は68歳以下です。ほとんどの人が引退する必要がない、次期の党大会で政治局常務委員になり得るわけです。そういう人たちだけに限って人気投票をする。その結果がですね、新華社によりますと、票は比較的集中し、幹部の現実符合している。つまり、特定の候補に比較的集まって、いいかげんな投票ではなくて、幹部の実態にあっていた。その結果は17回大会開催後の17期中央委員会に提案される政治局委員の候補の基礎とされた。政治局委員の選挙について「差額選挙」が行われたわけではないにしても、その前段で予備投票をやることによって党内の意見というものを集約した。このことが10月の新華社電で明らかになりました。

そういう目で政治局委員以上のリストを見ると、非常に面白いことがわかります。先ほどの政治局常務委員では非胡錦濤系の人が多くを占めているのですが、実は政治局委員の中では、胡錦濤に近い共青团系のメンバーが大量に進出しています。李源潮というのは江蘇省の書記をやって、最近人事部長に就任したのですが、李克強に次ぐ胡錦濤の側近であります。それから劉延東も統一戦線部長、そして汪洋・重慶市党書記、最近は広東省の党書記になるという情報が流れていますが、胡錦濤に近いメンバーが政治局委員には進出している。しかも年齢制限を加味しますと、面白いことがわかります。

今回の17回党大会で選ばれた政治局委員以上の25人を見ると、5年後の党大会で68歳以上になる13人は引退するわけです。今回の党大会で68歳定年制は確立されたので、68歳以上の人は自動

的に引退する。なんと13人も引退するんですね。残るのは12人です。政治局委員以上で残った12人が次期党大会の政治局常務委員の有力なメンバーになり得るのです。全部が全部そうではないにしても、次期政治局常務委員は現在の政治局委員以上の人が中心メンバーになるのですが、残った12人では共青团系が6人、太子党が4人、江沢民系が2人になる。結果的には共青团が圧倒的多数を占める。さらに中央委員から政治局委員に上がってくる人を見れば、この5年間を使って共青团系は非常に有力な布陣を固める。さらに、習近平がトップになった中央書記処書記も構成を見ますと、李源潮という胡錦濤の側近が入りましたし、令計画、この人は胡錦濤弁公室の主任だったんですが、最近党中央弁公庁の主任になった人です。言ってみれば胡錦濤の秘書みたいな人ですね。

従来は党中央弁公庁主任は政治局委員候補になったのですが、今回は中央委員に留め置かれたままです。中央書記処書記には胡錦濤の「側近中の側近」が2人も入ってですね、習近平は勝手なことをできない体制になっています。さらに、中央軍事委員会について詳しくは申し上げられませんが、副主席だった曹剛川国防相が引退して、副主席に1人欠員ができた。それから委員の中には、常万全総装備部長が入った。この人は蘭州軍区時代に胡錦濤と一緒にラサ争乱を鎮圧した、非常に近い関係にあるそうですが、そういう人も入った。等々考えてみますと、やはり5年後をにらんだ胡錦濤主導の人事が、この17回党大会でも端緒についたのではないかと。一言で言えば、胡錦濤は政治局常務委員の構成においては上海グループ・太子党を中心とする党の既得権層に対して対決を避け、むしろ彼らを大量に入れた。しかも習近平を上位にすることを了承して、あたかも一歩引いたかにみせて政治局委員には大量に自派を進出させて、5年後の主導権確立を狙っているのではないか、というのが私の見方です。

ただ、これは非常にリスクの高い問題なんですね。やはり中国のような巨大な国家においては、党の権力というのはきわめて重要な位置を占めているわけでありまして。党の最高権力をめぐる争いというのは常に残酷な政治闘争を引き起こしてきました。例えば文化大革命も毛沢東、劉少奇、あるいは林彪らによる最高権力をめぐる権力闘争でありましたし、天安門事件もですね。先ほど申し上げたように、鄧小平にチャレンジした趙紫陽という2大勢力が結果的には学生の民主化運動を巻き込んで大変な騒ぎを引き起こした。党の最高権力をめぐる争いというのは非常に激しい闘いになるのです。ですから、今回の党17回大会の人事で2人を登用して競わせるとか、そういう甘っちょろい考え方というのはなかなか中国では通用しない。

太子党が共青团系ののぐ？

この5年間は胡錦濤が最高指導者ですから、表向きそれにチャレンジするという人は少ないですけども、5年後に習近平に代えて李克強を最高指導者にするということが、そんなにうまくいくかどうか。さっき申し上げたように習近平の背後には党内の政治権力・経済権力を集中した既得利益集団の支持というものがあるんですね。それを侵害しようとした胡錦濤政権、李克強に連なる勢力の反腐敗闘争に対して、非常に激しい反発がある。共青团系主導の人事に対する激しい反発が、結果的には今度の政治局常務委員会の構成にも反映された。さらに習近平は今、次期総書記の最有力候補につけた。

今後ますます習近平の声望は高まるし、表向き胡錦濤に対しては逆らわないにしても習近平に繋がろうとする人が後をたたない。これは中国の社会の現実であります。しかも、もっと大きな背景で言えば中国共産党自身が計画経済から市場経済を全面化させ、社会の中に非常に巨大な既得利益

集団を生み出している。私が以前出した本の中で、政治権力を資本にして、経済権力を篡奪して、例えば国有企業を管理していた党の書記、党幹部が、さまざまな方法で国有企業を私物化して、私有企業にして自分がオーナーになる、これが凄まじい勢いで進行したわけですね。3つの代表論というのは非常にそれをエンカレッジする側面があり、結果的に陳良宇の罪状にもあらわれたように、国有資産というものを飲み込んだ新たな支配集団、これは取りも直さず党の権力も握っているわけですけども、そういう集団が中国社会の中に形成され、しかもそれが共産党の中にビルトインされている。実はこれが中国の現代社会の中で最もパワフルな集団であります。それにチャレンジしようとする反腐敗闘争は非常に困難なわけであります。

胡錦濤政権がこの間掲げてきた「和諧社会」、貧しい農民や労働者に依拠してですね、さまざまな所得再分配を通じて彼らの生活水準を向上させ、党の既得利益集団からさまざまなかたちで権力を奪い取る、そういう闘いというのは今非常に困難な局面を迎えている。こういう流れを見るとですね、胡錦濤のやり方というのは必ずしも勝算が高いとはいえないと私は思います。さまざまな方に聞きますと、やはり共青团系というのはダメだという評価も強いんですね。つまり共青团の人というのは、共産主義青年団そのものは14歳から28歳の青年を中心とした組織ですが、その上に立った幹部だけが30代4代になっても残れる。胡錦濤自身もそうでしたし、李克強もそうでした。40歳前後になって中央書記になってその後初めてですね、地方へ行ったりして経験を積んでいる。李克強にしてもですね、地方で実務経験をしたのは10年足らずです。実際には彼らは経済を運営したことなければ、地方での実務経験も少ない。この政治局員にあがってきた共青团系のメンバーの顔ぶれを見ても、地方での実務経験があるのは李

源潮くらい、あるいは最近あがってきた汪洋とかで、多くはやはり官僚組織を運営した経験しかないのですね。そういうのを見ていくと、共青团はやはり中国をマネージできないだろうという人も少なくありません。

企業家の中には、共青团の連中なんかが中国を動かせるわけもないと、彼らはまったく経済がわからない、そう言う人もいます。共青团の天下はあと5年ではないかと。これは本当かどうかわからないのですが、私自身は胡錦濤の今のやり方というのが果たして5年後上手くいくのかどうか、というのは極めて疑問に思っております。大体これが今日お話ししたいことで、他にも外交の面とかそういうところでお話しもした方が良くかとも思うのですが、とりあえず党大会の人事をめぐってはこれでお話を終えて後は質疑の時間にお話ししたいと思います。以上です。ありがとうございました。

[当日配布資料より]

▽中央政治局常務委員会委員（党内序列順）

- 1, 胡錦濤 (64) 総書記・軍事委主席。08年3月の全人代で国家主席に留任予定。以下同じ。
- 2, 呉邦国 (66) 全人代委員長に留任予定。
- 3, 温家宝 (65) 国務院総理に留任予定。
- 4, 賈慶林 (67) 政治協商会議主席に留任予定。
- 5, 李長春 (63) 思想, 宣伝担当に留任, 江沢民に近い。
- 6, 習近平 (54) 新任。中央書記処書記。太子党。国家副主席に就任予定。
- 7, 李克強 (52) 新任。常務副首相に就任予定。共青团出身。
- 8, 賀国強 (64) 新任。党中央規律検査委書記。曾慶紅に近い。
- 9, 周永康 (64) 新任。党中央政法委書記。曾慶紅に近い。

▽中央政治局委員（中国簡体字画数順）

王剛 (新, 65, 江沢民系), 王樂泉 (留, 62, 共青团系), 王兆国 (留, 66, 共青团系), 王岐山 (新, 59, 太子党), 回良玉 (留, 63, 回族), 劉淇 (留, 64, 賈慶林に近い), 劉雲山 (留, 60, 江沢民系), 劉延東 (新, 女, 61, 共青团系), 李源潮 (新, 56, 共青团系), 汪洋 (新, 52, 共青团系), 張高麗 (新, 60, 共青团系に接近), 張徳江 (新, 60, 李長春に近い), 俞正声 (留, 62, 太子党), 徐才厚 (新, 64, 軍), 郭伯雄 (留, 65, 軍) 薄熙来 (新, 58, 太子党)

▽中央書記処書記

習近平, 劉雲山, 李源潮, 何勇, 令計画, 王滬寧

▽中央軍事委員会主席, 副主席

主席 胡錦濤

副主席 郭伯雄, 徐才厚